



鯨墓

(国指定史跡)

長

門の捕鯨は、寛文12年(1672)以降、鯨組の活躍で、捕獲の数も大きく伸びた。

天保年間(1830、47)には、秋から翌春にかけての一シーズンに、50頭以上捕れたこともあり、藩の財政も大いにうるおった。

半面、浦では「生計のためとはいえ、生き物の命を奪うと言うことは、しのび難い」という、クジラの霊への供養の思いも芽生えた。

通浦の向岸寺五世・讚誉上人は、鯨組網頭、池永家の出身であった。

上人は、延宝7年(1679)、寺の隠居所である清月庵の境内に観音堂を建て、クジラの回向をはじめた。

元禄5年(1692)、鯨組網頭の手で鯨墓が建てられた。墓は、かこう岩づくりで、正面上部に「南無阿弥陀仏」、下部にクジラの霊を供養する言葉が刻まれている。墓のうしろの空き地には、クジラを解体した際に出た72体の胎児が埋められている。埋葬は、墓の建立から、明治のはじめごろに及ぶものである。

通鯨唄

(市指定無形民俗文化財)

通

では、結婚式や棟上げ、船おろしなどの宴席によく鯨唄が歌われる。

この唄はもともと、捕鯨の季節に作業場や宴席で歌われた労働歌である。

唄は、まず一座の長老から歌いはじめ、これに続いてみんなが歌うという格式あるしきたりがある。

歌う形は、鯨太鼓(締め太鼓)2つを中心に、みんなが円く座る。頭には赤いはち巻きを締め、合掌の形で両手をすり合わせながら歌うことになっている。

通鯨唄は、長州捕鯨の基地として大いに栄えた通の当時の栄光をいまに伝えていく。唄はしっかりと浦に根を下ろし、浦人たちはこの唄に誇りをもっている。



三二六〇	網頭池永藤右衛門・早川作左衛門、沖海網代と内海の境を「立目鳥ヶ瀬」とする
五二九二	向岸寺に鯨位牌、鯨鮫過去帳、清月庵に鯨墓建つ
六一五三	野波瀬鯨組、藩命により解散
八一六五	このころ弥兵衛、平四郎、六太夫などの波指が西や向に住んでいた
九一六六	藩主吉広、通・瀬戸崎両鯨組の「鯨突き仕形」を見る(宝永五年にも)
宝永四一七〇	春3月6日、池水三郎、橘グリに漂着した神霊を祀り、この日を浦の漁申しとする(住吉神社創立)
享保元一七四	讚誉上人(106歳)、浦の行事として鯨回向行われる
寛保二一七三	大火112軒焼失
寛延元一七四	内海網代の出漁と入漁をめぐり瀬戸崎浦と紛争おこり、藩府の裁定をうける(同三年にも)
宝曆九一七五	通・瀬戸崎浦ともに不漁
天明五一七五	2月、大火270軒焼失
文化三一八〇	経営困難となり、沖海網代を吉岐の豊屋又左衛門の突き組に貸与
三三八五	沖海および内海網代を吉岐勝本浦の鯨組に貸与
三三八六	沖海網代を肥前平戸の手嶋仙蔵に貸与
天保二二八三	沖海網代を向う5ヶ年、肥前呼子の中尾組に貸与
弘化三二八四	10月、弘化4年1月にかけて24頭捕獲(3年11月29日には5頭捕獲)以後、鯨の回遊激減する
安政三二八五	通・瀬戸崎両鯨組、西市の中野半左